

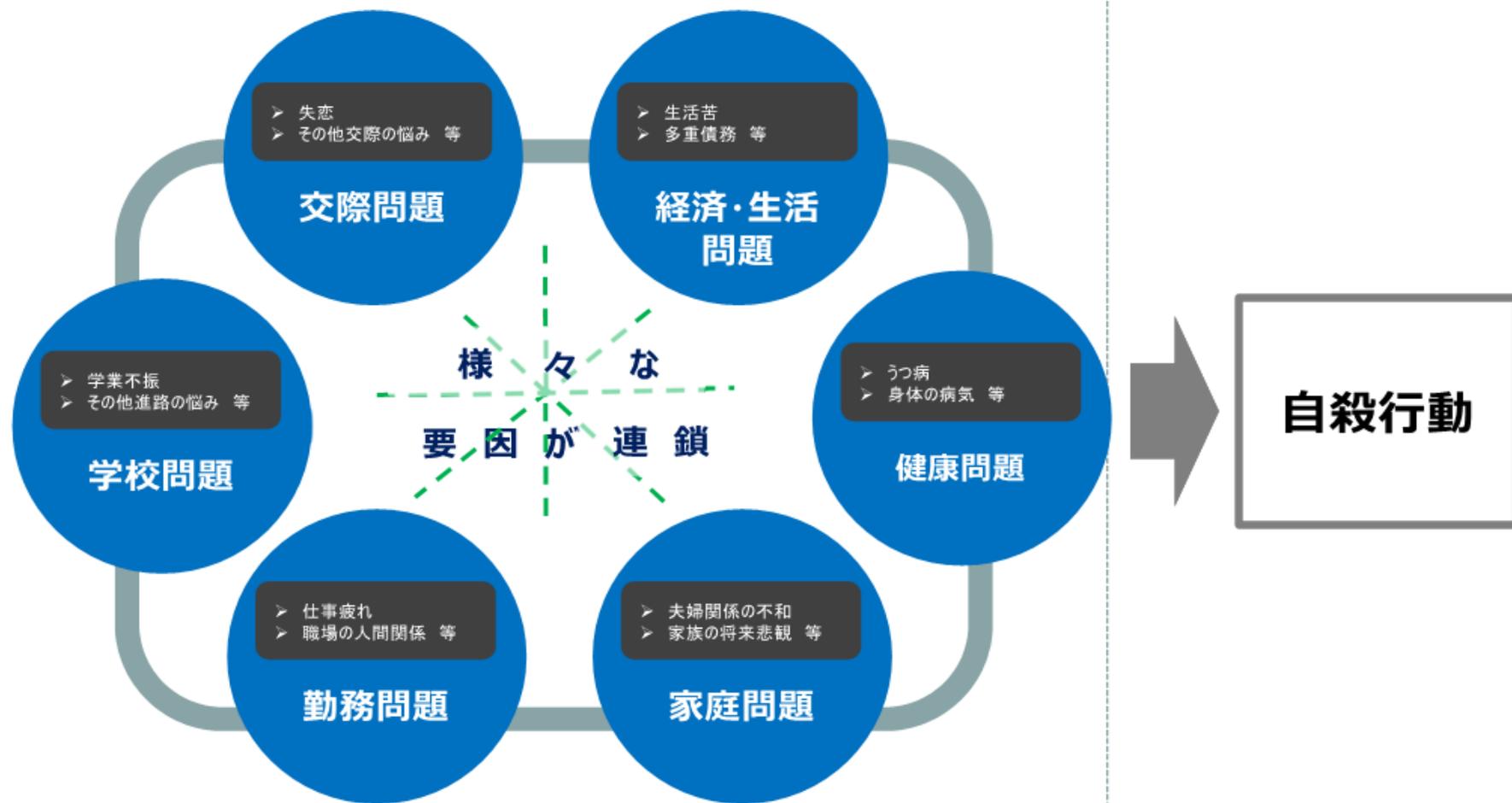
自殺未遂者における 既遂リスクの検討

中川優馬、近藤文乃、持永展孝
宮崎県福祉保健課

はじめに

自殺の原因・背景について

- 自殺の多くは多様かつ複合的な原因及び背景を有しており、様々な要因が連鎖する中で起きている。
(「経済・生活問題」や「家庭問題」等、他の問題が深刻化する中で、これらと連鎖して、うつ病等の「健康問題」が生ずる等)

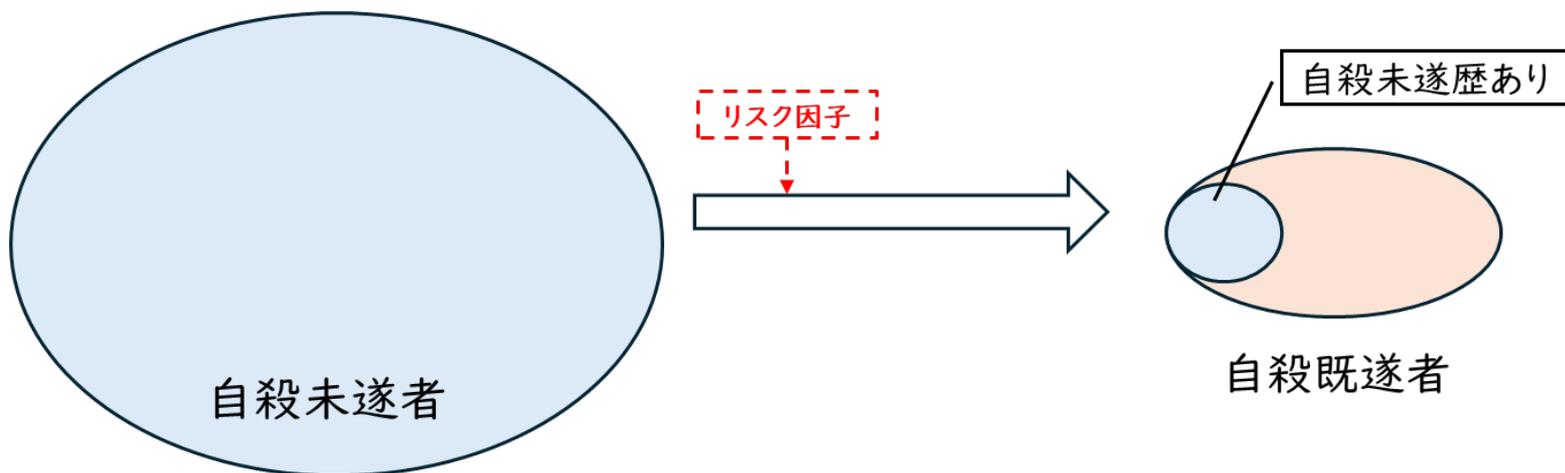
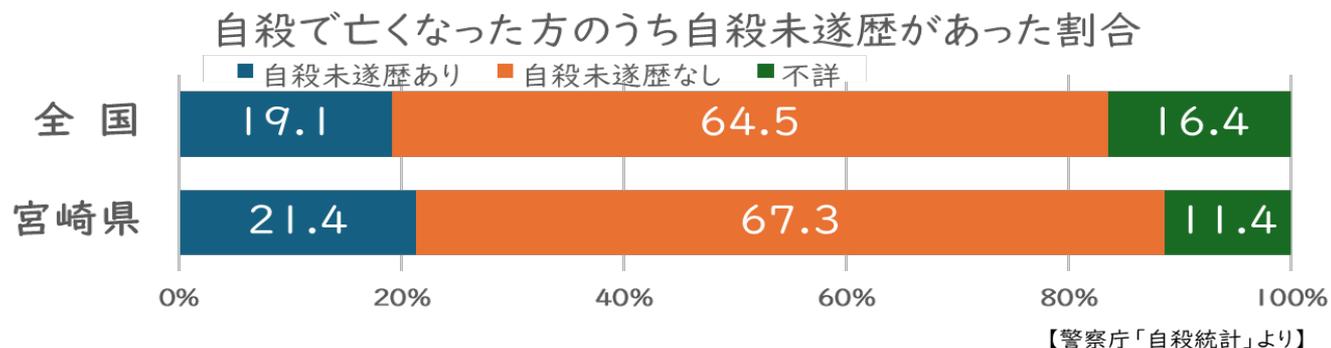


自殺の多くは多様かつ複合的な原因及び背景を有している

はじめに

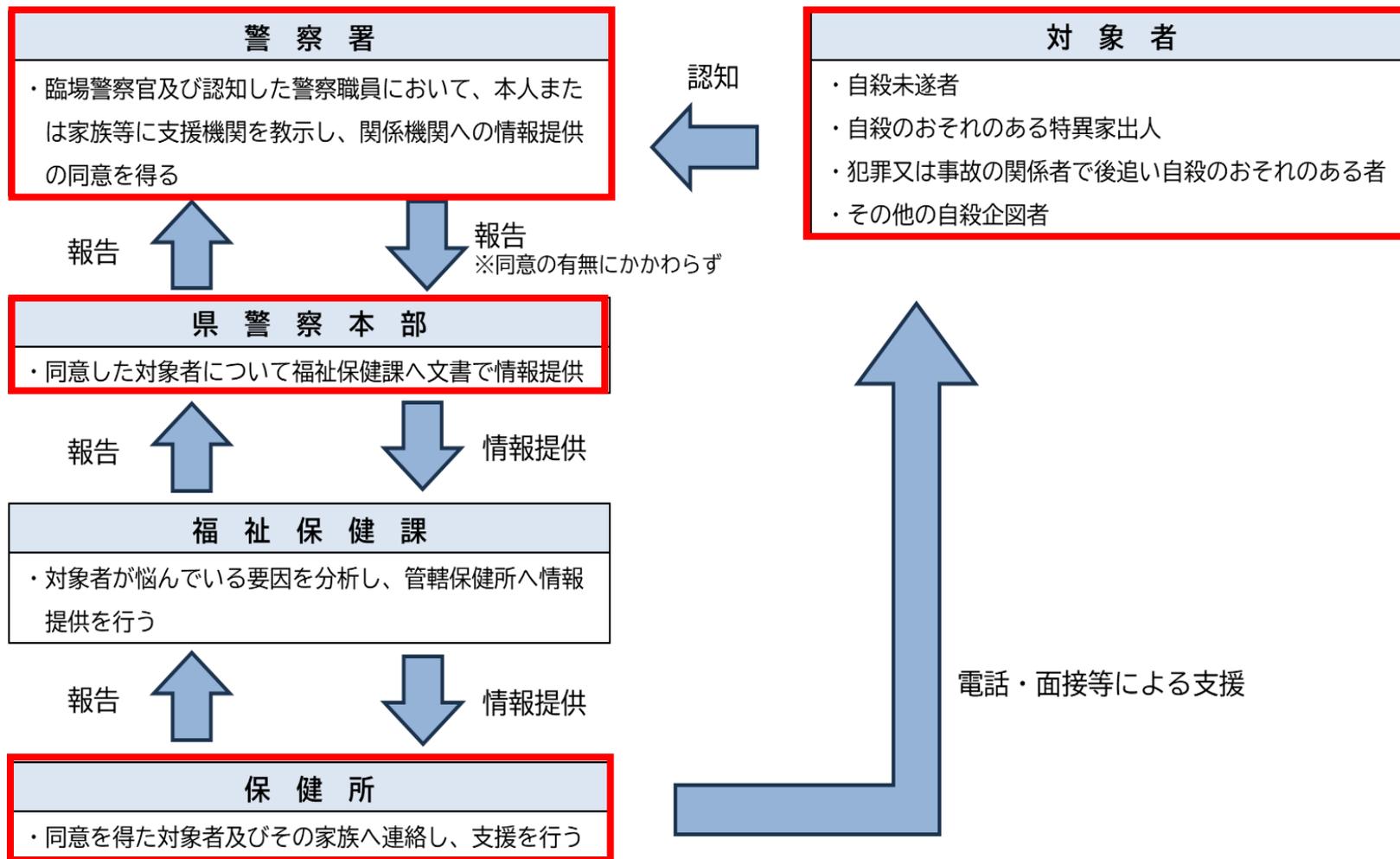
自殺に追い込まれて亡くなった方の約2割には、自殺未遂歴があり、自殺未遂は自殺の最大のリスク要因とされている

今回、自殺未遂者が未遂後に再企図を図り、自殺既遂に至るリスク因子について検討した



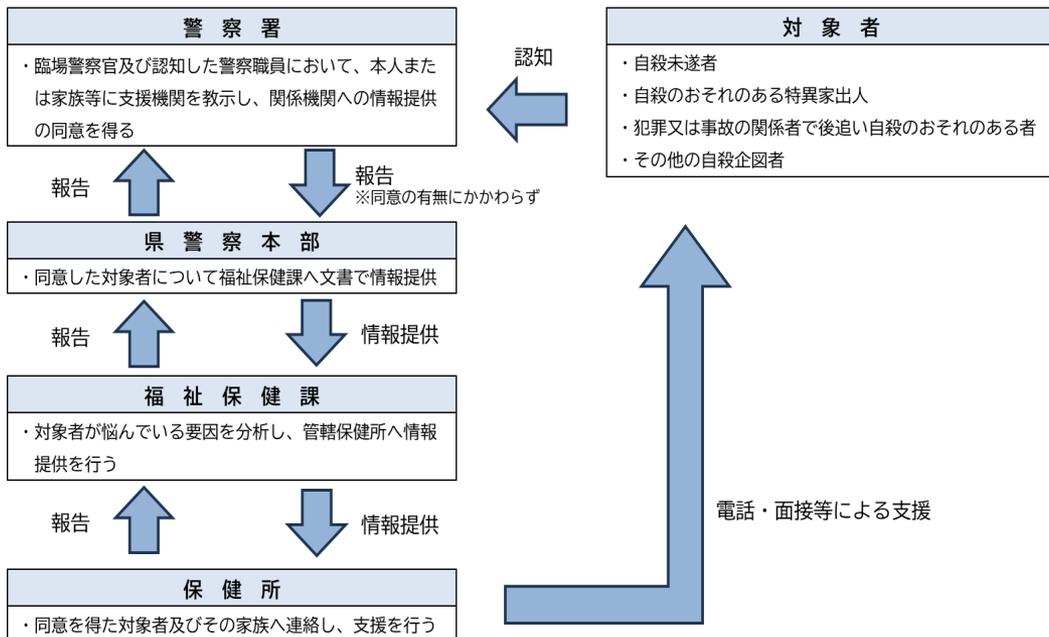
方法（分析対象）

自殺企図者への個別支援フローチャート



方法(分析対象)

自殺企図者への個別支援フローチャート



本県に住所地のある

410名※実人数

(平成29年から令和5年まで)

年齢、性別、職業、自殺未遂時の手段、自殺未遂に至った要因、要因数、自殺未遂の回数

自殺未遂者



自殺を死因として死亡届の提出のあった者
(自殺既遂者)

厚生労働省

人口動態統計死亡票及び死亡個票
(平成31年から令和5年までの5年間)

人口動態統計調査票
利用申請



氏名、生年月日、住所
でマッチング



方法(分析手法)

○単変量解析

既遂した群とそれ以外の2群に分けた統計解析を実施

- ・年齢・・・**Mann-Whitney のU検定**
- ・それ以外のカテゴリカル変数・・・**Fisher の正確検定**

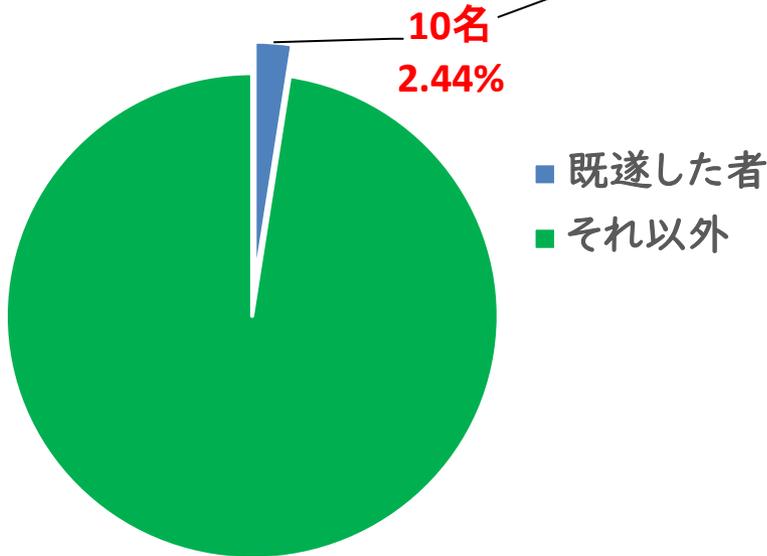
○多変量解析

既遂となったかどうかを目的変数とした**ロジスティック回帰分析**

※統計解析には、SPSS Statistics(Ver.30)及びEZRを使用

結果 (単変量解析)

既遂した者の割合 (n=410)



自殺未遂から既遂までの日数

単位:日

1年以内						2年以内			2年以上	
17	30	58	86	188	355	443	575	818	1,441	

1年以内 … 6名

平均 401日

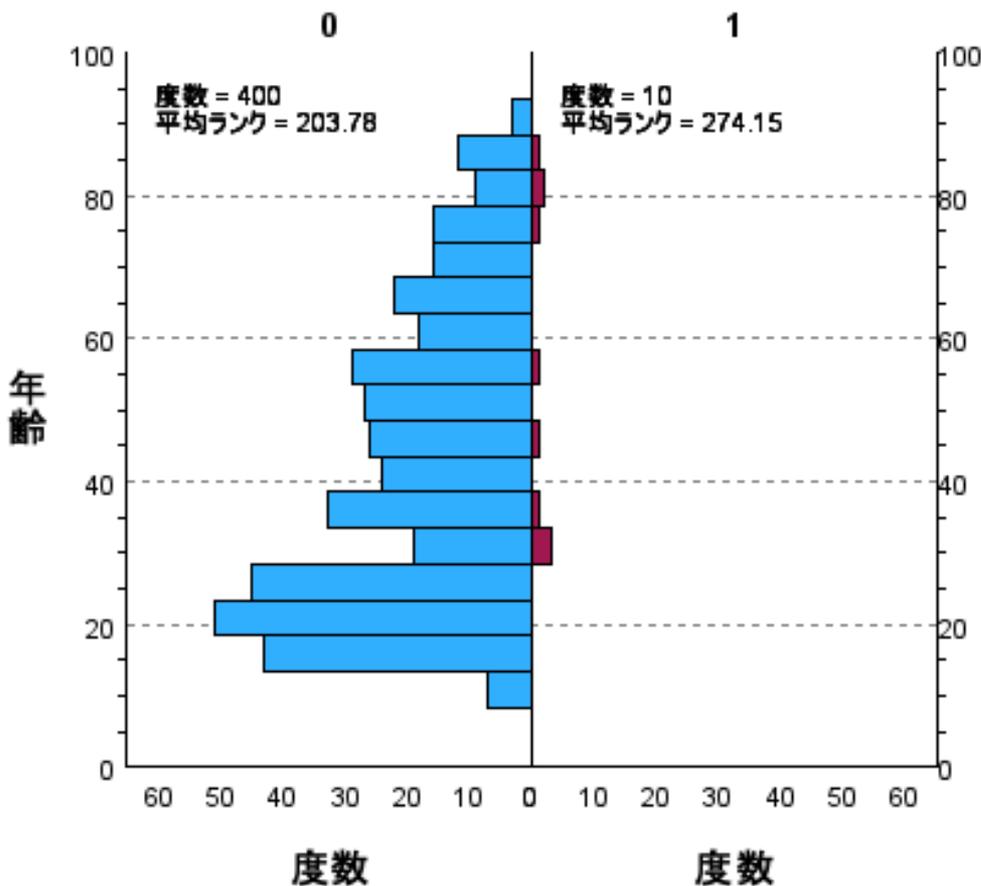
	男	女	計
既遂	6	4	10
それ以外	192	208	400

年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	計
既遂			4	1	1		1	3		10
それ以外	62	86	53	55	52	39	30	20	3	400

結果(単変量解析)

独立サンプルによる Mann-Whitney の U の検定

既遂



独立サンプルによる Mann-Whitney の U の検定の要約

合計数	410
Mann-Whitney の U	2686.500
Wilcoxon の W	2741.500
検定統計量	2686.500
標準誤差	370.073
標準化された検定統計量	1.855
漸近有意確率 (両側検定)	.063

既遂した者とそれ以外の2群において、
年齢分布(中央値)に有意差はみられなかった。

結果(単変量解析)

既遂者とそれ以外の2群におけるクロス集計表

		自殺未遂者		Fisherの正確検定
			既遂	P値
性別	男性	192	6	0.532
	女性	208	4	
有職・無職	有職者	152	6	0.392
	学生・生徒等	55	0	
	無職者	187	4	
	不詳	6	0	
同居人	あり	300	6	0.282
	なし	100	4	
	家庭問題あり	110	4	0.475
	なし	290	6	
	健康問題あり	119	4	0.495
	なし	281	6	
	経済・生活問題あり	56	3	0.162
	なし	344	7	
	勤務問題あり	53	2	0.630
	なし	347	8	
	交際問題あり	35	2	0.225
	なし	365	8	
	学校問題あり	32	0	1.000
	なし	368	10	
	その他問題あり	38	2	0.254
	なし	362	8	

※1人につき最大4つまで計上
自殺未遂に至った要因

		自殺未遂者		Fisherの正確検定
			既遂	P値
要因数	1つ	314	3	0.001 *
	2つ	82	6	
	3つ	4	1	
自殺未遂時の手段	首つり	39	4	0.015 *
	服毒(医薬品)	48	3	
	服毒(医薬品以外)	13	0	
	練炭等	18	0	
	排ガス	1	1	
	その他のガス	1	0	
	焼身	1	0	
	刃物	85	0	
	入水	5	0	
	飛び降り	36	0	
	飛び込み	16	0	
その他	137	2		
未遂の回数	1回	385	9	0.331
	2回	13	1	
	3回	2	0	

n=410
*P<0.05

[]は、調整済み標準化残差

※絶対値が1.96以上の場合、有意に多い(少ない)とした。

結果（多変量解析）

目的変数：既遂となったかどうか

説明変数：【自殺未遂時の手段（首つり）】、自殺未遂時の【要因数】

既遂となったかを目的変数としたロジスティック回帰分析

	オッズ比	95%信頼区間		P値
		下限	上限	
調整変数 年齢	1.027	0.995	1.059	0.104
性別	1.443	0.370	5.624	0.597
首つり	5.281	1.222	22.815	0.026 *
要因数	6.960	2.365	20.485	<0.001 *

有意差あり

※強制投入法

*P<0.05

※すべての変数において多重共線性は認められなかった。

※Hosmer-Lemeshowの検定：P=0.141

※Nagelkerke R²:0.243

自殺未遂時の手段が「首つり」である場合、そうでない場合と比べてオッズが5.281高くなる

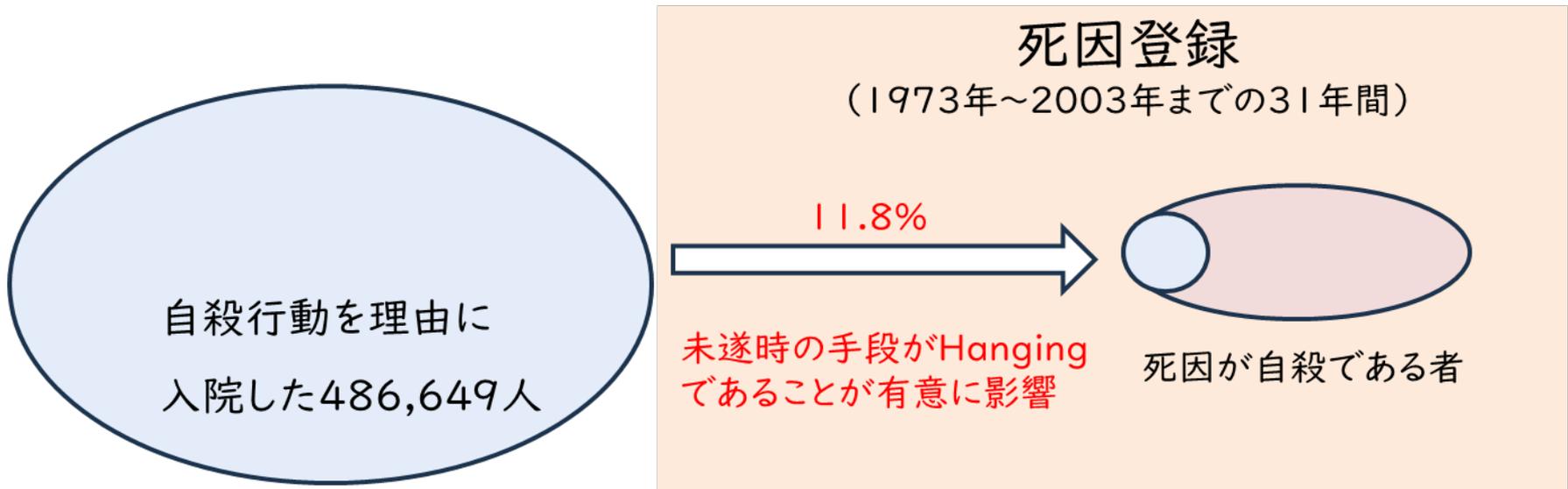
自殺未遂に至った要因が2つの場合、1つの人と比べてオッズが6.960高くなる

※事象の発生頻度が少ない（10%未満）の場合、オッズ比とリスク比は近似する

考察（先行研究より）

○Runeson R 他、2010年

- ・1973～1982年にかけてスウェーデンで自殺行動を理由に入院した48,649人が対象
- ・2003年までの死因登録の情報と照合（自殺未遂後21年～31年間の追跡）
- ・5,740人（11.8%）が自殺により死亡していた
- ・自殺未遂時の手段として最も多かったのは、Poisoning（服毒）であったが、追跡期間の自殺割合が最も高かったのは、Hanging（首つり）であった（383/700人中、54.7%）
Poisoningに対するHangingのハザード比は6.2（95%信頼区間：5.5-6.9）

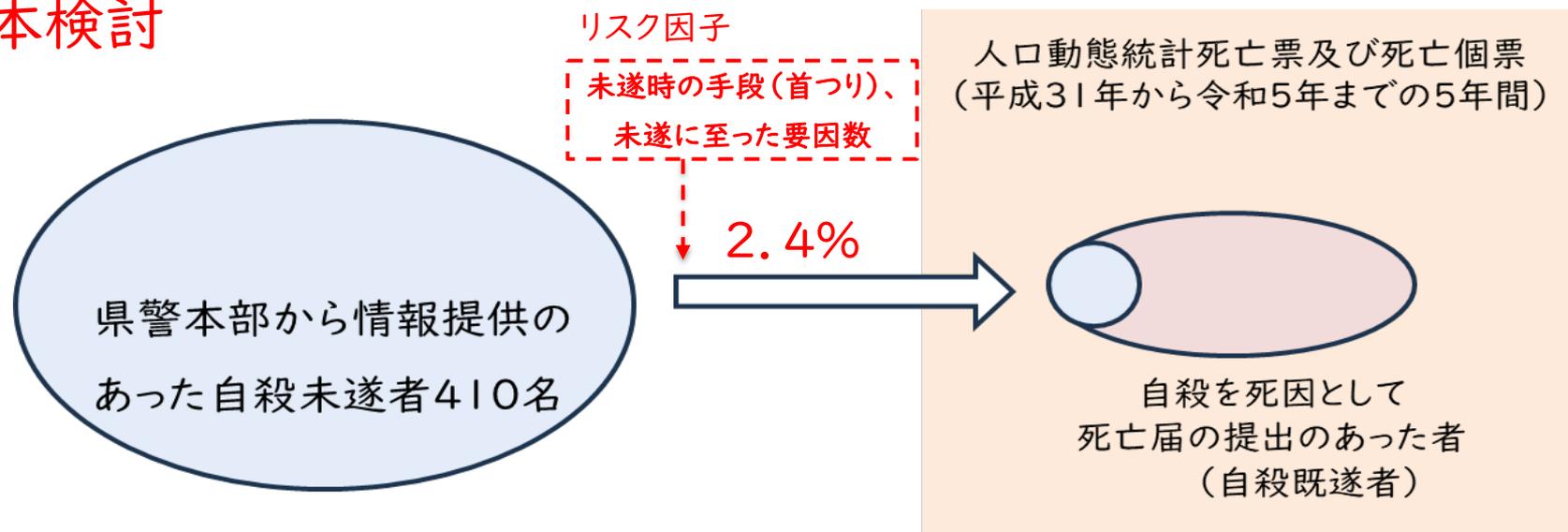


考察（先行研究と本検討との比較）

○県警本部から情報提供のあった自殺未遂者は、**ハイリスク集団**である

○自殺未遂時の**手段**と抱えている**要因数**（問題の数）が、リスク因子として作用することが示唆された

本検討



考察（カタルシスについて）

支援の中でよくある場面

（家族から）「今は落ち着いているので、そっとしておいてほしい」

カタルシス（浄化作用）・・・

自殺が企図されたあとに、それまで不安定だった患者の精神状態が一見改善したようにみえることがある状態。自殺を企図したことで、本人がそれまで抱えていたさまざまな問題が解消されたわけではないので、これはみせかけの改善であり、早晩、精神状態は悪化し危険な状態に戻ってしまう。

（精神科救急医療ガイドライン、2022）

自殺未遂から既遂までの日数										単位：日
1年以内					2年以内			2年以上		
17	30	58	86	188	355	443	575	818	1,441	

既遂者の半数以上が1年以内の再企図であり、支援者はリスクアセスメントをした上で、支援の必要性を説明することが重要

※先行研究においては、35.5%が1年以内の既遂であった

まとめ

- ・県警本部から情報提供のあった自殺未遂者410名について、未遂時の状況から既遂に至るリスク因子について検討
- ・10名(2.4%)が自殺未遂後に再企図し、既遂となっていた
- ・「自殺未遂時の手段(首つり)」と「自殺未遂に至った要因数※」がその後の既遂リスクに影響を及ぼすことが示唆された
 - ※「家庭問題」、「健康問題」、「経済生活問題」、「勤務問題」、「交際問題」、「学校問題」、「その他」の数

研究の限界・・・

- ・サンプル数が限られていること
- ・同様の先行研究(特に、国内)が少なく、比較検討が難しい